第十八講　古文の読解①

Step 1

一　次の文章を読み、あとの(1)~(4)の問いに答えなさい。

> 平安中期に上東門院（じょうとうもんいん）（藤原彰子（ふじわらのしょうし）のこと。一条天皇の后（きさき）。）の身のまわりで起こった出来事についての文章である。

まことや、この御時、一つの不思議ありける。上東門院の御方の御帳（注1）（みちやう）の内に、犬の子を生みたりける、思ひかけぬありがたきこと（めったにないこと）なりければ、Aおほきに驚かせ給ひて（驚きなさって）、（注2）江匡衡（がうきやうかう）といふ博士（はかせ）に問はれければ（おたずねになったところ）、「Bこれ、Cめでたき御吉事なり。犬の字は、大の字のそばに点をつけり。その点を上につけば、天なり。下につけば、太なり。その下に、子の字を書きつづくれば、天子（天皇）とも、太子（皇太子）とも読まるべし。かかれば（このようであるから）、太子生れさせ給ひて、天子にいたらせ給ふべし」とぞ申しける。

そののち、はたして皇子御誕生ありて、ほどなく位につき給ふ。後一条天皇（ごいちでうてんわう）、これなり。匡衡、風月（ふげつ）の才に富めるのみならず、Dかかる心ばせども深かりけり。

（「十訓抄」より）

（注１）御帳の内＝位の高い人の生活の場として、垂れ幕をかけて区切った場所。
（注２）江匡衡＝大江匡衡（おおえのまさひら）のこと。学者。「がうきやうかう」は中国風に読んだもの。

(1) 文章中のAおほきにを現代仮名づかいに改め、**すべてひらがな**で書きなさい。

(2) 文章中のBこれが指し示す部分を文章中から**二十字以上、二十五字以内で抜き出して、はじめと終わりの五字**をそれぞれ書きなさい。

はじめ　□□□□□　～終わり　□□□□□

(3) 文章中にCめでたき御吉事なりとあるが、なぜそう言えるのか。それを説明した次の文の ① 、 ② に入る言葉を書きなさい。
ただし、 ① は**五字以内**で、 ② は**十字以内**で書くこと。

「犬」の字は、 ① を変え、下に「子」を加えると、 ② を予感させる言葉に変わるから。

① □□□□□
② □□□□□□□□□□

(4) 文章中にDかかる心ばせども深かりけりとあるが、どのようなことに対しこう言っているのか。最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　匡衡が、自然現象に関する広い知識により、奇妙な出来事の背景をあざやかに解き明かしたこと。

イ　匡衡が、漢文の幅広い知識により、不可解な出来事を中国の故事を引用して整然と説明したこと。

ウ　匡衡が、とても優れた予知能力により、意外な出来事から上東門院の将来の姿を言い当てたこと。

エ　匡衡が、豊富な知識と優れた機転により、予想外の出来事をたいへん縁起が良いと解釈したこと。

□

【千葉県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

*小式部内侍（こしきぶのないし）、この世ならず（はなはだしく）1わづらひけり。かぎりになりて（もう終わりかというまでになり）、人顔なども見知らぬほどになりて（人の顔なども見分けがつかないほどになってしまって）、臥（ふ）したりければ、和泉式部（いづみしきぶ）、かたはらにそひて、額をおさへて2泣きけるに、目をわづかに見あけて、母が顔をつくづくと3見て、息の下に（苦しい息の下で）、

いかにせむ（どうしたらいいのでしょうか）4いくべき方をおもほえず親に先だつ道を知らねば（親に先だって死んでいく道も知りませんので）

と、わななきたる声にて候（さうら）ひければ（ふるえる声でよみましたところ）、5天井の上に、あくびさしてやあらむ（あくびをかみ殺したかと思われるような声で）、とおぼゆる声ありて、「あな、あはれ」といひてけり。さて、身のあたたかさもさめて、よろしくなりにけり。

（「十訓抄」より）

（＊注）小式部内侍…後に出てくる和泉式部の娘。

Step 2

問一　「1わづらひ」を現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。

Step 2

問二　「2泣きけるに」「3見て」について、主語の組み合わせとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

	2の主語		3の主語
ア	小式部内侍	―	和泉式部
イ	小式部内侍	―	小式部内侍
ウ	和泉式部	―	小式部内侍
エ	和泉式部	―	和泉式部

Step 3

問三　次の文章は、「4いくべき方をおもほえず」について説明したものです。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

この表現には、同音を利用して二つの意味を持たせる表現技法すなわち（①）が用いられています。
その表現技法によって、「生きる方法がわからず」と「（②）方向がわからず」という二つの意味を持たせています。

(1)　空欄①にあてはまるものとして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　枕詞　　イ　対句　　ウ　体言止め　　エ　掛詞

(2)　空欄②にあてはまる言葉を、漢字とひらがなを用いて、一語で書きなさい。

Step 3

問四　次の会話は、「5天井の上に、あくびさしてやあらむ、とおぼゆる声ありて、『あな、あはれ』といひてけり」に関する生徒と先生のやりとりです。この会話を読み、あとの問いに答えなさい。

生徒　天井の上であくびをかみ殺したような声を出した人がいるようですが、それは誰ですか。

先生　その質問に答える前に、私から質問しましょう。最後の一文に、「身のあたたかさもさめて、よろしくなりにけり」とありますね。あなたが質問している天井の上の声の主によって、何かに変化が起きたことが述べられているのですが、その内容はわかりますか。

生徒　前からの流れで考えれば、（　①　）ことですか。

先生　よくわかりましたね。では、あなたが質問している天井の上の声の主についてですが、実は、以前授業で読んだ『古今和歌集』の冒頭部分がヒントになるのですが、どうでしょうか。

生徒　えーっと……もしかして（　②　）ですか。

先生　そのとおりです。

生徒　そうすると、（　①　）のは、（　②　）が（　③　）に心動かされたからなんですね。

(1)　空欄①にあてはまる内容として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　病床にいた娘が、病気の重い状態から回復した

イ　娘が、長年思いを寄せていた男性と結婚した

ウ　長い間わずらっていた母親の病気が完治した

エ　母親の怒りが冷めて、娘が母から許してもらえた

(2)　空欄②にあてはまるものとして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

(『古今和歌集』冒頭部分)

「力をも入れずして、ア天地(あめつち)を動かし、イ目に見えぬ鬼神(おにがみ)をもあはれと思はせ、ウ男女(をとこをむな)の仲をも和らげ、エたけき武士(もののふ)の心をも慰むるは、歌なり」

□

(3)　空欄③にあてはまる内容として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　母親が娘の無念さを詠(よ)んだ歌

イ　母親が自身の辛さを詠んだ歌

ウ　娘が自身の悲しみを詠んだ歌

エ　娘が母親への感謝を詠んだ歌

□

【鳥取県】

〈Note〉

第十八講　古文の読解①

Step 1

一

解答

(1) おおきに　(2) (はじめ) 上東門院の (〜終わり) みたりける　(3) ① 点のつけ方　② のちの天皇の誕生 (それぞれ同意可)　(4) エ

解説

(1) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。
(2) 上東門院の御帳の内で起きた出来事を指している。
(3) ① 大の字の上に点をつけると「天」、下につけると「太」となることを言っている。② 「太子生れさせ給ひて、天子にいたらせ給ふべし」と推測している点に着目する。
(4) 貴人の室内で犬が出産することは珍しく驚くべきことだが、あえてそれを吉事とした匡衡の機転について述べている。

口語訳

本当に、この御代に、一つの不思議なことがあった。上東門院彰子の御方の御帳台の中で、犬が子を生んだことが、思いがけずめったにないことだったので、(上東門院は) たいそう驚きなさって、江匡衡という博士におたずねになったところ、(匡衡は)「これはめでたくよろこばしい事です。犬という字は、大の字のそばに点をつけたものです。その点を大の上につければ、天になります。下につければ、太になります。その下に子という字を続ければ、天皇とも、皇太子とも読むことができます。このようであるから、皇太子がお生まれになって、天皇にまでおなりになることでしょう」と申し上げた。

そののち、その言葉通りに皇子のご誕生があって、まもなく位にお就きになった。後一条天皇がその人である。匡衡は、詩文の才能にめぐまれていただけでなく、このようなことにも心遣いが深かった。

Step 2・3

二

解答

問一、わずらい　問二、ウ　問三、(1)エ　(2)行く　問四、(1)ア　(2)イ　(3)ウ

解説

問一、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。また、「づ」は「ず」にする。

問二、2は、病気になった娘のかたわらで、母が泣いている。3は、泣いている母の顔を、娘がじっと見ている。

問三、(2)「いく」という言葉に、「生く」と「行く」という二つの意味を持たせている。

問四、(1)小式部内侍が重い病気で、今にも死にそうになっていた。「身のあたたかさも…なりにけり」は、その病気がよくなったことを表している。(2)本文で、この声の主は「あはれ」と思っている。「古今和歌集」の冒頭で、「あはれ」と思ったとされている者が入る。(3)「いかにせむ…道を知らねば」と詠んだのは、娘である小式部内侍。病気で生きる方法も、これから行くところもわからないという気持ちを詠んでいる。

口語訳

小式部内侍が、はなはだしく病気になった。もう終わりかというまでになり、人の顔なども見分けがつかないほどになってしまって、寝ていたところ、和泉式部がそばに寄り添って、額をおさえて泣いていると、（小式部内侍が）目を少しだけ開けて、母の顔をじっと見て、苦しい息の下で、

どうしたらいいのでしょうか。生きる方法もわからず、行くべき方向もわかりません。親に先だって死んでいく道も知りませんので

とふるえる声でよみましたところ、天井の上から、あくびをかみ殺したかと思われるような声で、「ああ、あはれなことだ」と言った。そして、体の熱も引いて、小式部内侍の病気はよくなったことだ。